「世紀の大発見！松帆銅鐸」

昨年４月南あわじ市で発見された“松帆銅鐸”は、数十年に一度の大発見といわれています。

現在、日本国内で大きさ１２ｃｍから１ｍを越すものまで約５００個の銅鐸が発見されていますが、銅鐸内部にあった「舌（ぜつ）」（棒）や、つり手の部分に紐の一部（繊維片）が残っていることがわかり、このことは国内初の発見です。つり手にひもを巻きつけて木などに下げ、内部にぶら下げた舌で音を鳴らす銅鐸（「聞く銅鐸」）の使用法を裏付ける成果になるといわれています。

銅鐸は「聞く銅鐸」、「見る銅鐸」（大型化）の論争、突如として姿を消し、丘陵地地中から発見される謎など古くから考古学会の重要な研究テーマとして、多くの研究者の注目テーマです。

ちなみに兵庫県は全国一の出土数を誇り、加古川北高校の近くの八幡町からも加古川流域で唯一「望塚（ぼんづか）銅鐸」が出土しています。

播磨町にある兵庫県立考古博物館では、２月２７日（土）から３月２７日（日）まで期間限定で「松帆銅鐸」が特別公開されます。さらに、３月１３日（日）には今回の大発見に大きく関与されている国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長難波洋三氏が「南あわじ市松帆銅鐸の位置づけについて」と題しての特別講演が予定されています。

日本考古学会を揺るがす大発見に立ち会える絶好の機会に遭遇できる幸せを感じます。

ぶらり加古川第 22 号

平成 28 年 2 月